

東晋南朝の健康における華林園について

——「詔獄」を中心としてみた——

戸川 貴行

はじめに

西晋末の混乱により、大量の漢族が華北から江南へ避難した（以下、彼らを僑民とよぶ）。その後の東晋において僑民は中原恢復を優先したため、帰北まで皇帝の行宮の地たる健康の増築を控えるべしとした。しかし、上述の状況は僑民の子孫が土着化し、天下の中心を洛陽でなく健康と考えるようになるにつれ徐々に変化していく。さらには北魏の華北統一、元嘉二十七年（四五〇）の北伐失敗により、中原恢復の可能性は極めて低くなった。こうしたことを受け、東晋後半ごろから健康の大規模な増築が行われるようになり、劉宋孝武帝期にはその地に天下の中心を意味する王畿という行政区が設置されるまでに至った。⁽¹⁾

このようにして増築された健康のうち、その中心となる宮城部分では朝政の場である太極殿以南にくらべ、それ

より北に位置する空間の方が皇帝にとって生活・遊宴の場として私的性格が強かった⁽²⁾。一方、南朝では皇帝の側近となった寒人層の台頭が、士人層の支配、ひいては帝権の強化につながったとする見方が存在する（以下、寒人層という場合、とくに断らない限り、皇帝の側近となった寒人層を指すこととする）。では、かかる北に位置する空間の増築と寒人層の台頭には、何らかの関係があるのだろうか。かりにそうであるとすれば、それは具体的に如何なるものであったのだろうか。

太極殿の北に位置する空間としては、たとえば『建康実録』卷一二、太祖文皇帝元嘉二十三年の条に引く「地輿志」に、

呉の時の舊き宮苑なり。晉孝武 更に宮室を築立す。宋元嘉二十二年、重脩して之を廣む。又た景陽・武壯の諸山を築き、池を鑿ちて天淵と名づけ、景陽樓と通天觀を造る。孝武大明中に至り、紫雲 景陽樓に出で、因りて改めて景雲樓と爲し、又た琴堂を造る。東に雙樹連理有り、又た改めて連玉堂と爲し、又た靈曜前・後殿を造り、又た芳香堂・日觀臺を造る。……梁武 又た重閣を造り、上は重雲殿と名づけ、下は興光殿と名づく。朝日・夕月の樓、之に登るに及びて、階道 遶樓すること九轉たり。

吳時舊宮苑也。晉孝武更築立宮室。宋元嘉二十二年、重脩廣之。又築景陽・武壯諸山、鑿池名天淵、造景陽樓以通天觀。至孝武大明中、紫雲出景陽樓、因改爲景雲樓、又造琴堂。東有雙樹連理、又改爲連玉堂、又造靈曜前・後殿、又造芳香堂・日觀臺。……梁武又造重閣、上名重雲殿、下名興光殿。及朝日・夕月之樓、登之、而階道遶樓九轉。

とあり、皇帝の御苑「華林園」が東晉後半から大規模に増築されたことが記されている。本稿では、この華林園と寒人層との関係に焦点をあてて考察を行いたい。

従来、華林園については、村上嘉実氏がその古典的研究のなかで東晋後半から宋齊時代を中心として皇帝が近臣らと遊宴する場であり、観賞用の芸術的な庭園であったことを指摘しておられる³⁾。こうした華林園の文化的側面に関する指摘は、秦漢から隋唐における御苑の展開を論じた近年の妹尾達彦氏による論考にも見受けられる⁴⁾。

皇帝による士人層の支配という点からみた際、たしかに遊宴は帝が彼らに優遇をあらわすという意味において重要である。しかし、そののみによって士人層を十分に支配することは難しいであろう。では、華林園において彼らをより強力に支配するための施策はとられなかったのであろうか。この問題について、本稿では皇帝が士人層を対象に華林園でおこなった勅命刑獄である「詔獄」に注目し、そうした勅命刑獄と寒人層との関係如何といった点から明らかにしたい。

一方、渡辺信一郎氏は宋齊時代の華林園は、皇帝が大獄（重要事案）・獄囚に関わる再審判をする場であり、その理由を華林園が宮城の北方すなわち刑獄・裁判にかかわる陰の方向に属していたためとし、こうした再審判は劉宋末から南齊では宮城外に位置する閼武堂・中堂といった軍礼・軍事関係施設においても行われたとしておられる⁵⁾。筆者は華林園が皇帝による再審判の場であったこと、そうした再審判が劉宋末から南齊において閼武堂・中堂で行われたことについては、氏の見解に賛同するものである。しかし、閼武堂・中堂は軍事関連の施設であるのみでなく、宮城より南に位置したことがすでに辻正博氏によって指摘されており、それだけに華林園における再審判を単に方角という点のみから説明することはできないであろう⁶⁾。

このことに関連して、近年、張宇鋒氏は考古学的見地から建康の華林園に中国中世の都城に共通する「北辺防御」機能が存在したとする。ただし、氏は建康の発掘がいまだ不十分なこともあり、今後、より多くの資料が公表されるのを待たなくてはならないと慎重な態度を示している⁷⁾。従って、ここでは北辺防御という軍事とも関わる機能

指摘した見解があることに言及しておくが、筆者のみるところ、華林園の軍事的機能についてはそうした北辺防御にとどまらず、寒人層を中心とする親衛軍の主な活動拠点であったことを示す史料が存在する。そうであるとすれば、華林園と閔武堂・中堂がともに軍事関連の施設であるという視点から、再審判の場となった理由を新たに検討することができるのではないだろうか。

本稿は上記の問題意識から、建康の華林園について、寒人層と皇帝の勅命刑獄である「詔獄」・親衛軍との関係といった点から考察し、もって東晋南朝が中原恢復をめざす国家から江南に立脚した国家へと変質していく一軌跡に迫ろうとするものである。

なお、華林園の性格は劉宋・南齊をへて梁に至ると、獄官の整備、仏教の影響などから大きく変化することが、すでに渡辺、小林聡両氏によって指摘されている⁽⁸⁾。こうした点を踏まえ、以下では宋齊時代を中心に考察をおこなう。

第一節 宋齊時代の華林園における「詔獄」

本節では論の展開の都合上、まず宋齊時代の華林園において、士人層の支配、ひいては帝権強化の一環として「詔獄」という勅命刑獄が行われたことについて述べる。

さて、「詔獄」とは富田健之氏によれば、皇帝の意志によって開始され、皇帝自らが判決を下す勅命刑獄のことであり、廷尉が直接的な責任者として事にあたる廷尉獄および地方の獄とは異なるものであった⁽⁹⁾。ここでいう廷尉獄・地方の獄のうち、皇帝のもとまで上がってくる大獄に関わる案件が渡辺氏のいう再審判の対象になる。本稿に

おいては富田氏の見解をふまえ、こうした廷尉・地方の獄と異なる勅命刑獄を「詔獄」ということにする。

『宋書』卷六九范曄伝に、元嘉二十二年（四四五）九月のこととして、

詔して曰はく、（徐）湛之の表 此の如く、良に駭惋すべし。曄 素より行檢無く、少くして瑕釁を負ふも、但だ才藝の施すべきを以て、故に其の長ずる所を収め、頻りに榮爵を加へ、遂に清顯に參からしむ。而るに險利の性、谿壑を過ぐる有り、恩遇を識らず、猶ほ怨憤を懷く。……便ち收掩し、法に依りて窮詰すべし、と。其の夜、先づ曄及び朝臣を呼び華林の東閣に集め、客省に止む。先づ已に外に於いて（謝）綜及び（孔）熙先兄弟を収むるや、並びに皆な款服す。時に上 延賢堂に在り、使をして曄に問はしめて曰はく、……、と。上重ねて問はしめて曰はく、……、と。上 復た問はしめて曰はく、……、と。明日、仗士 曄を送り廷尉に付し、獄に入る。

詔曰、湛之表如此、良可駭惋。曄素無行檢、少負瑕釁、但以才藝可施、故收其所長、頻加榮爵、遂參清顯。而險利之性、有過谿壑、不識恩遇、猶懷怨憤。……便可收掩、依法窮詰。其夜、先呼曄及朝臣集華林東閣、止於客省。先已於外收綜及熙先兄弟、並皆款服。于時上在延賢堂、遣使問曄曰、……。上重遣問曰、……。明日、仗士送曄付廷尉、入獄。

とあり、『後漢書』の撰者として著名な范曄が華林園の東閣をへて客省という場所において、同園にいた劉宋文帝から使者を通じ訊問をうけた後、廷尉に付されたことが記されている。『宋書』卷七一徐湛之伝に、その范曄について、

初め、劉湛 誅に伏し、殷景仁 卒す。太祖 沈演之・庾炳之・范曄等に委任し、後に又た江湛・何瑀之有り。曄 誅せられ、炳之 免ぜられ、演之・瑀之 並びに卒す。是に至りて江湛 吏部尚書と爲り、湛之と並びに

權要に居り、世之を江・徐と謂ふなり。

初、劉湛伏誅、殷景仁卒。太祖委任沈演之・庾炳之・范曄等、後又有江湛・何瑀之。曄誅、炳之免、演之・瑀之並卒。至是江湛爲吏部尚書、與湛之並居權要、世謂之江・徐焉。

とあるように、彼は沈演之、庾炳之、江湛、何瑀之とともに、当時、文帝がもっとも信頼していた大臣の一人であったが、文帝の弟である彭城王義康を利用した謀反に加担し誅殺された。

『宋書』卷八五謝莊伝に、大明元年（四五七）における都官尚書の謝莊による上奏を載せて、

舊と官長 囚を竟め畢はれば、郡 督郵を遣はして案驗し、仍りて就ち刑を施す。督郵 賤吏にして、能く官長より異なるに非ず、案驗の名有るも、而も研究の實無し。愚 謂へらく此の制 宜しく革むべし。今より入重の囚、縣 考正し畢はれば、事を以て郡に言ひ、并びに囚身を送り、二千石に委ねて親ら覈辯に臨ませ、必ず聲を収め讐を吞ませ、然る後 就ち戮せよ。若し二千石 決すること能はずんば、乃ち廷尉に度れ。神州（揚州を指す）の統外、之を刺史に移し、刺史に疑ひ有れば、亦た臺獄に歸せよ。

舊官長竟囚畢、郡遣督郵案驗、仍就施刑。督郵賤吏、非能異於官長、有案驗之名、而無研究之實。愚謂此制宜革。自今入重之囚、縣考正畢、以事言郡、并送囚身、委二千石親臨覈辯、必收聲吞讐、然後就戮。若二千石不能決、乃度廷尉。神州（揚州を指す）統外、移之刺史、刺史有疑、亦歸臺獄。

とあり、劉宋時代、揚州では県―郡―廷尉―尚書という手順をへる廷尉獄、それ以外の州は県―郡―州―尚書という地方の獄を整備するよう上奏がなされたことが伝えられているが、先述した范曄⁽¹⁰⁾の記事はそれと異なる皇帝の勅命刑獄すなわち「詔獄」が華林園において范曄のような大臣を対象に行われたことを示しているよう。

南齊の事例については、『南齊書』卷四二蕭湛伝に、建武二年（四九五）六月のこととして、

上 華林園に幸し、謀及び尚書令王晏等數人と宴し歡を盡くす。坐罷むも、謀を留め晚く出だし、華林園に至るや、仗身執りて還た省に入る。上 左右莫智明を遣はし謀を數めて曰はく、……、と。省に於いて之を殺す。……詔して曰はく、蕭謐擢でらるること凡庸よりし、識用輕險なるも、倅會に因藉して、早く驅馳に預かる。……而るに豺狼其れ性にして、凶謀滋々甚し。……廷尉に收付し、速やかに刑書を正すべし、と。

上幸華林園、宴謐及尚書令王晏等數人盡歡。坐罷、留謐晚出、至華林閣、仗身執還入省。上遣左右莫智明數謐曰、……於省殺之。……詔曰、蕭謐擢自凡庸、識用輕險、因藉倅會、早預驅馳。……而豺狼其性、凶謀滋甚。……可收付廷尉、速正刑書。

とあり、明帝が當時、領軍將軍であつた蕭謐と華林園で遊宴を行ったこと、その後「華林閣」から出ていこうとする彼を「省」に入れ使者を通じて譴責してから殺害したことなどが伝えられている。范曄伝の記事との比較により、史料中の「華林閣」とは華林園の東閣、「省」とは客省のことを指すとされよう。先にみた范曄は客省で訊問された後、廷尉に付され処刑にいたるが、蕭謐の場合にみられるように、「詔獄」においてはその前に大臣を殺害したとしても少なくとも形式上は廷尉に付したことにするものと考えられる。こうした范曄伝、蕭謐伝の記事は華林園が遊宴を通じ大臣をはじめとする士人層に優遇をあらわすのみでなく、「詔獄」によって彼らを牽制し帝權に従わせる場であつたことを示しているよう。

また、『南齊書』卷四二「王晏伝に、建武四年（四九七）正月のこととして、

元會畢はり、乃ち晏を華林省に召し之を誅す。詔を下して曰はく、晏閭閻の凡伍、少くして持操無きも、人乏しきに階緣し、官途に班齒す。……而るに長惡流れ易く、構扇彌々大たり。……並びに廷尉に收付し

て、國典を肅明すべし、と。

元會畢、乃召晏於華林省誅之。下詔曰、晏閭閻凡伍、少無持操、階緣人乏、班齒官途。……而長惡易流、構扇彌大。……並可收付廷尉、肅明國典。

とあり、建武四年（四九七）正月に元會儀礼が終わった後、当時、尚書令であった王晏が華林省すなわち華林園の客省に召され誅殺されてから、廷尉に付すという詔が下されたことが伝えられている。

さらに、『南齊書』卷四四徐孝嗣伝に、永元元年（四九九）十月のこととして、

冬、孝嗣を召し華林省に入れ、茹法珍を遣はして藥を賜はしむ。孝嗣 容色 異ならず、少く能く酒を飲み、藥 斗餘に至り、方めて卒す。乃ち詔を下して曰はく、……徐孝嗣 世資に憑藉し、早く殊遇を蒙り、際に

階緣し、遂に台鉉に登る。匡翼の誠 聞こゆる無く、諂黷の迹 屢々著はる。沈文季 門世原闕

冬、召孝嗣入華林省、遣茹法珍賜藥。孝嗣容色不異、少能飲酒、藥至斗餘、方卒。乃下詔曰、……徐孝嗣憑藉世資、早蒙殊遇、階緣際會、遂登台鉉。匡翼之誠無聞、諂黷之迹屢著。沈文季門世原闕

とあり、南齊東昏侯のとき、尚書令であった徐孝嗣が華林園の客省で自殺させられたこと、その際、使者として彼のもとに自殺に用いる毒藥をもたらしたのが茹法珍という人物であったことが示されている。徐孝嗣伝の最後には当時、尚書左僕射であった沈文季に関する記事が「原闕」となっているが、先にみた范曄らの事例からこの部分には「付廷尉」という語が存在したものと考えられる。『南齊書』卷四四沈文季伝に、その沈文季について、

孝嗣と同じく害せらる。其の日 先づ召見せられ、文季 敗るるを知るも、舉動 常の如く、車に登り顧みて曰はく、此の行 恐らくは往きて反らざるなり、と。華林省に於いて死す、時に年五十八なり。

同孝嗣被害。其日先被召見、文季知敗、舉動如常、登車顧曰、此行恐往而不反也。於華林省死、時年五十八。

とあり、彼が徐孝嗣とともに殺害されたことが伝えられている。『南齊書』卷四四沈昭略伝に、その甥で侍中であった沈昭略について、

永元元年、始安王遙光 東府に起兵せしとき、昭略を城内に執へんとす。昭略 潜かに南より出で、淮を濟り臺に還る。是に至り文季と俱に召されて華林省に入る。茹法珍等 藥酒を進み、……死す、時に年四十餘なり。永元元年、始安王遙光起兵東府、執昭略於城内。昭略潜自南出、濟淮還臺。至是與文季俱被召入華林省。茹法珍等進藥酒、……死、時年四十餘。

とあり、沈昭略が華林園の客省に召され、徐孝嗣と同じく使者の茹法珍がもたらした毒藥によって自殺させられたことが記されている。史料にもあるように、このとき叔父の沈文季も沈昭略とともに華林省に召され殺害されていることから、その死にはやはり茹法珍が関わっていたとされよう。

右より、劉宋・南齊においては遊宴を通じ大臣をはじめとする士人層に優遇をあらわすのみでなく、「詔獄」によって彼らを牽制し帝権に従わせる場として華林園が用いられたと考えられる。次節では、この華林園が寒人層を中心とする親衛軍の主な活動拠点であったこと、こうした軍事的機能をもつが故に同園が再審判の場となったことについて、前掲の徐孝嗣伝、沈昭略伝にでてきた茹法珍という人物を手がかりに検討してみたい。

第二節 華林園の軍事的機能

さて、『南史』卷七七茹法珍伝に、先述した茹法珍について、

茹法珍、會稽の人、梅蟲兒、吳興の人。齊東昏の時 並びに制局監と爲り、俱に愛幸せらる。江祐・始安王遙

光等 誅せられてより後、左右の應敕・捉刀の徒 並びに國命を專らにするに及び、人間 之を刀敕と謂ひ、權 人主を奪ふ。

茹法珍、會稽人、梅蟲兒、吳興人。齊東昏時並爲制局監、俱見愛幸。自江祐・始安王遙光等誅後、及左右應敕・捉刀之徒並專國命、人間謂之刀敕、權奪人主。

とあり、前節にみた「詔獄」において皇帝と大臣の間に使者として介在した茹法珍が制局監とよばれる官についていたこと、東昏侯によって江祐・始安王遙光らが誅殺された後、應勅・「捉刀」とよばれる帝の左右が非常に權力をもったことなどが伝えられている。史料中の制局監について、先行研究では劉宋孝武帝期以降、士人層がつく國軍の長たる領軍將軍に対し、寒人層がこの武官につき領軍將軍の正常な機能發揮を妨げたことが指摘されている。⁽¹⁾

また、『魏書』卷九八島夷蕭道成伝には、右と同様の記事を載せて、

寶卷 使ち自ら志を得るや、忌憚する所無く、日日 出遊す。愛幸せる茹法珍・梅蟲兒等及び左右の應敕・捉御刀の徒 並びに國命を專らにし、民間 之を刀敕と謂ふ。

寶卷便自得志、無所忌憚、日日出遊。愛幸茹法珍・梅蟲兒等及左右應敕・捉御刀之徒並專國命、民間謂之刀敕。とあり、茹法珍伝の「捉刀」を「捉御刀」としている。この「捉刀」、「捉御刀」は、その語義および「左右」の語との結びつきから、武器を携え皇帝の側に待る兵士の形容であったと考えられる。

さらに、『弘明集』卷一九に引く梁武帝「淨業賦」に、東昏侯のときのこととして、

御刀⁽²⁾・應勅の梅蟲兒・茹法珍・俞靈韻・豐勇之、是れ等の如き多輩、誌公の所謂 亂りに頭を戴く者なり。御刀・應勅梅蟲兒・茹法珍・俞靈韻・豐勇之、如是等多輩、誌公所謂亂戴頭者也。

とあり、「御刀」という語が「捉刀」、「捉御刀」と同様に應勅と並称されていることより、この三者は同じ存在で

あったとされよう。以下ではこれらを一括して「御刀」とよぶが、右の史料でその代表的人物として挙げられている茹法珍が本伝によれば寒人層のつく制局監に就官していること、「御刀」が武器を携え皇帝の側に侍る兵士の形容であったことなどをあわせ考えると、彼らは寒人層を中心とする親衛軍的存在であったとして大過ないであろう。さて、『梁書』卷一〇楊公則伝に、南齊末、蕭衍（のちの梁武帝）の軍隊が建康宮城を攻めたときのことを載せて、

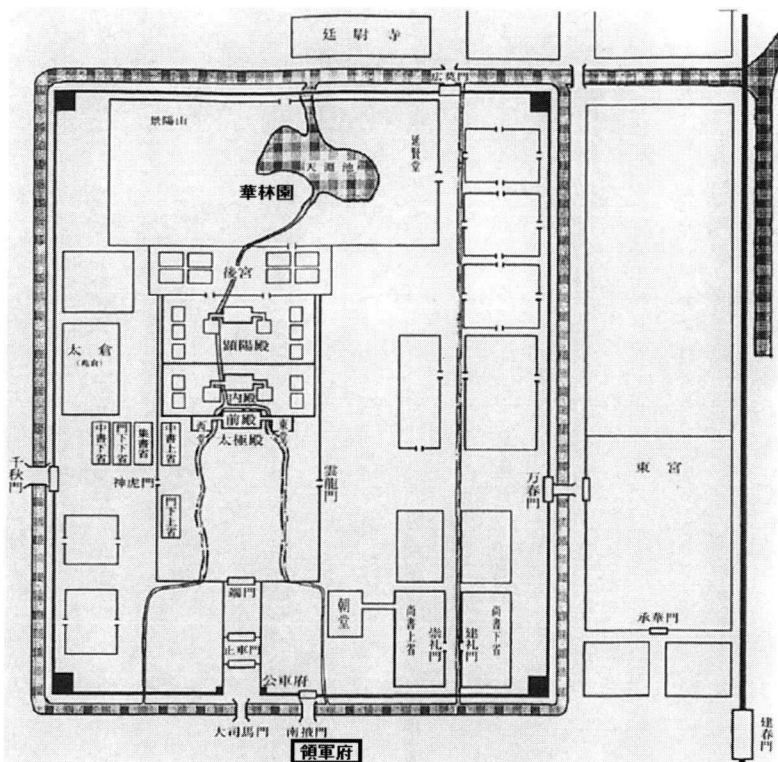
郢城 平らぐや、高祖 衆軍に命じ即日 俱に下らしむ。公則 命を受け先驅し、徑ちに柴桑を掩ふ。江州 既に定まるや、旌を連ねて東下し、直ちに京邑に造る。公則 號令 嚴明にして、秋毫も犯さず、所在 頼らざるは莫きなり。大軍 新林に至るや、公則 越城より移り領軍府壘の北樓に屯して、南掖門と相對す。

郢城平、高祖命衆軍即日俱下。公則受命先驅、徑掩柴桑。江州既定、連旌東下、直造京邑。公則號令嚴明、秋毫不犯、所在莫不頼焉。大軍至新林、公則自越城移屯領軍府壘北樓、與南掖門相對。

とあり、領軍將軍の軍府が宮城の南に位置する南掖門と對峙していたことが記されている（宋齊建康宮城図参照）。その一方で前節にみたように、茹法珍が華林園の「詔獄」において皇帝と大臣の間に介在しているという点からみた際、制局監をはじめとする「御刀」の主な活動拠点が華林園であったことが想定される。いまこのことについて考えてみよう。

『南齊書』卷二「予章王疑伝に、永明二年（四八四）における予章王疑の上啓を載せて、

侍宴を違遠し、將に一紀を蹶えんとして、憂苦すること之を聞くするに、始めて開顔するを得。近く頻りに侍座し、悲喜するに勝へず。……比日 禁斷 整密なるは、此れ自から常理なり。外聲に乃ち、臣 華林に在り、輒ち御刀を捉えてより、此に因りて更に嚴しと云ふ。情を度り理を推すに、必ず容に爾すべからず、爲に復た



宋齊建康宮城図〈渡辺氏註（2）論文の図に加筆〉

上啓して知らしむるのみ。
 違遠侍宴、將踰一紀、憂苦聞之、
 始得開顏。近頻侍座、不勝悲喜。
 ……比日禁斷整密、此自常理。
 外聲乃云、起臣在華林、輒捉御
 刀、因此更嚴。度情推理、必不
 容爾、爲復上啓知耳。
 とあり、南齊武帝のとき予章王疑が
 華林園に侍宴し「御刀」をとらえて
 より帝の警護がさらに嚴重になった
 という外聞が存在したこと、そうし
 た外聞に対し、王が人情と道理から
 してあり得ないと反論したことなど
 が述べられている。史料から、「御
 刀」は華林園で警護を行っていたこ
 とを見てとることができる。
 また、先に一部引用した「浄業賦」

御刀・應勅の梅蟲兒・茹法珍・俞靈韻・豐勇之、是れ等の如き多輩、誌公の所謂 亂りに頭を戴く者なり。誌公とは是れ沙門寶誌にして、形服 定まらず、示見 方無し。時に群小 其の神異を疑ひ、乃ち之を華林外閣に羈ぐ。

御刀・應勅梅蟲兒・茹法珍・俞靈韻・豐勇之、如是等多輩、誌公所謂亂戴頭者也。誌公者是沙門寶誌、形服不定、示見無方。于時群小疑其神異、乃羈之華林外閣。

とあり、制局監である茹法珍ら「御刀」が仏僧である宝誌の神異を疑い、彼を華林園の外閣に拘留したことが伝えられている。それが他の場所でなく、なぜ華林園であったのかという点からみた際、「淨業賦」の記事は制局監をはじめとする「御刀」の主な活動拠点が華林園であったとする先の想定を支えるところがある。

さらに、『南史』卷五齊本紀下に、蕭衍が建康を攻めんとしたときのことを載せて、

還た御刀左右及び六宮と華光殿に於いて軍壘を立て、金玉を以て鎧仗を爲り、親自ら陣に臨み、被創の勢を詐り、板を以て擱げしめ將に去らんとし、此を以て厭勝とす。

還與御刀左右及六宮於華光殿立軍壘、以金玉爲鎧仗、親自臨陣、詐被創勢、以板擱將去、以此厭勝。

とあり、その際、東昏侯が「御刀」とともに華林園の華光殿に軍壘を築き、厭勝のための儀礼を行ったことが伝えられている。かりに制局監ら「御刀」が華林園と全く関係なかったとすれば、彼らが同園でこうした軍壘の建造を担当することはまず考え難いであろう。

右より、華林園は制局監をはじめとした「御刀」とよばれる親衛軍の主な活動拠点であったと考えられる。

なお、制局監の動きは劉宋孝武帝期以降、顕著になるが、それより前にこれと同様の性格を有した武官に殿中將軍が存在した。『宋書』卷六九范曄伝に、前節にみた范曄とともに処刑された孔熙先について、

上 復た問はしめて曰はく、熙先 近く華林門の外に在り、寧んぞ之に面辨せんと欲するか、と。曄 辭窮して、乃ち曰はく、熙先 苟に臣を誣引す、臣 當に如何にすべけんや、と。熙先 曄の服せざるを聞き、笑ひて殿中將軍沈邵之に謂ひて曰はく、凡そ諸々の處分、符檄書疏、皆な范曄の造り及び治定する所なり。云何ぞ今に於いて方に此の如き抵蹋を作さんや、と。

上復遣問曰、熙先近在華林門外、寧欲面辨之乎。曄辭窮、乃曰、熙先苟誣引臣、臣當如何。熙先聞曄不服、笑謂殿中將軍沈邵之曰、凡諸處分、符檄書疏、皆范曄所造及治定。云何於今方作如此抵蹋邪。

とあり、彼が華林園で「詔獄」がなされた際、殿中將軍に供述を行ったことが伝えられている。

この殿中將軍については、『宋書』卷四〇百官志下、殿中將軍の条に、

殿中將軍・殿中司馬督。晉武帝の時、殿内の宿衛、號して三部司馬と曰ひ、此の二官を置き、左右二衛に分隸せしむ。江右の初め、員十人。朝會宴饗あれば、則ち將軍戎服し、左右に直侍す。夜に城の諸門を開けば、則ち白虎幡を執りて之を監す。晉孝武の太元中、選を改め、門閤を以て之に居らしむ。宋高祖の永初の初め、増して二十人と爲す。其の後 員を過ぐる者、之を殿中員外將軍・員外司馬督と謂ふ。其の後 並びに復た員無し。

殿中將軍・殿中司馬督。晉武帝時、殿内宿衛、號曰三部司馬、置此二官、分隸左右二衛。江右初、員十人。朝會宴饗、則將軍戎服、直侍左右。夜開城諸門、則執白虎幡監之。晉孝武太元中、改選、以門閤居之。宋高祖永初初、増爲二十人。其後過員者、謂之殿中員外將軍・員外司馬督。其後並無復員。

とあり、晋代における遊宴の際、帝の左右に侍して警護をつとめる武官であったこと、華林園を増築した東晉孝武帝期から劉宋期に至る過程で改選・増員がなされたことなどが伝えられている。これは東晉孝武帝期以後、華林園

で遊宴が行われるにつれ、その警護にあたる殿中將軍の存在が重視されるようになったことを示すものと考えられる。

さらに、『晋書』卷七三庾亮伝に、成帝のとき庾亮が郗鑒に与えた牋を載せて、

主上 八・九歳より以て成人に及ぶまで、入れれば則ち宮人の手に在り、出づれば則ち唯だ武官小人あるのみにして、讀書 音句を受くるに従る無く、顧問 未だ嘗て君子に遇はず。侍臣 俊士に非ずと雖も、皆な時の良なりて、今古の顧問を知る。豈に殿中將軍・司馬督と年を同じくして語らんや。

主上自八・九歳以及成人、入則在宮人之手、出則唯武官小人、讀書無從受音句、顧問未嘗遇君子。侍臣雖非俊士、皆時之良也、知今古顧問。豈與殿中將軍・司馬督同年而語哉。

とあり、東晋において殿中將軍が帝の顧問応対を務めることがあったこと、それは「武官小人」の専権として非難されるものであったことなどが述べられている。この点は先の茹法珍伝に「專國命」と称された制局監と同様であったといえよう。こうした殿中將軍のもつ性格は華林園の増築、帝権強化の動きなどと相まって、劉宋孝武帝期に至る過程で制局監を中心とするものへ変化していったと考えられる。

江南政権においては通常、官僚を弾劾する際、御史中丞、尚書左丞による手続きをへていた。⁽¹⁴⁾しかし、諸王・大臣による専権がなされた場合、こうした手続きを経ている間に情報の漏洩ひいては彼らによるクーデタが生じる危険性があった。華林園の「詔獄」はそうした事態を未然に防ぐべく、寒人層である制局監ら「御刀」の存在を背景に帝権を安定させる狙いもあって行われたものと考えられる。

では、華林園がこうした親衛軍の存在する軍事関連の場であったという点からみた際、同園で大獄・獄囚に関わる再審判が行われたことはどのように位置づけられるのであろうか。いまこの点について、宋齊時代の裁判案件と

軍事との關係を手がかりにみてみよう。

『宋書』卷三武帝紀下に、永初元年（四二〇）七月壬子の詔を載せて、

往に軍國の務め殷く、事に權制有り、劫科峻重たること、之を一時に施す。今ま王道 惟れ新にして、政和法簡なれば、一に之を除き、還た舊條に遵ふべし。

往者軍國務殷、事有權制、劫科峻重、施之一時。今王道惟新、政和法簡、可一除之、還遵舊條。

とあり、『宋書』卷八五謝莊伝に、大明元年（四五七）における都官尚書の謝莊による上奏を載せて、

陛下 踐位するや、親ら聽訟に臨み、億兆 相ひ賀して、以爲らく冤民無きなり、と。而るに比ごろ囹圄 未だ虚しからず、頌聲 尚ほ缺く。臣 竊かに謂へらく五聽の慈、宰物に宣びず、三宥の澤、未だ民謠に洽からず。頃年 軍旅の餘弊もて、劫掠 猶ほ繁く、監司の討獲、多く其の實に非ず。或ひと身の咎を免るるを規り、國患を慮らず、楚對の下、誣濫せざること鮮し。身 鈇鎖の誅に遭ひ、家 孥戮の痛に嬰れ、比伍同閑、罪に及ばざるは莫し。是れ則ち一人の罰謬、坐する者數十なり。……臣 近ごろ兼訊し、重囚八人に見え、其の初めを旋觀するに、死に餘罪有るも、其の理を詳察すれば、實に並びに辜無し。恐らくは此等 少からず、誠に怵惕すべきなり。

陛下踐位、親臨聽訟、億兆相賀、以爲無冤民矣。而比囹圄未虚、頌聲尚缺。臣竊謂五聽之慈、弗宣於宰物、三宥之澤、未洽於民謠。頃年軍旅餘弊、劫掠猶繁、監司討獲、多非其實。或規免身咎、不慮國患、楚對之下、鮮不誣濫。身遭鈇鎖之誅、家嬰孥戮之痛、比伍同閑、莫不及罪。是則一人罰謬、坐者數十。……臣近兼訊、見重囚八人、旋觀其初、死有餘罪、詳察其理、實並無辜。恐此等不少、誠可怵惕也。

とあって、史料中の「劫」とは威力をもって奪う強盜のことであるが、右の記事をみた際、江南政權では劉宋武帝

より前から「劫」により罪人とされる者が軍事との関連で非常に多かった点、それに対し、皇帝や都官尚書が刑罰の減免を行おうとしていた点などを窺うことができる。『宋書』卷六六何尚之伝に、

義熙五年、吳興武康縣の民 王延祖 劫を爲し、父睦 以て官に告ぐ。新制、凡そ劫身 斬刑にして、家人棄市たり。

義熙五年、吳興武康縣民王延祖爲劫、父睦以告官。新制、凡劫身斬刑、家人棄市。

とあり、「劫」に対する刑罰が義熙五年（四〇九）の段階で「凡そ劫身 斬刑にして、家人 棄市たり。」というように非常に重く、かつ連座をとまなうものであったことが記されている。先にみた謝莊伝に「身 鉄鎖の誅に遭ひ、家 孥戮の痛に嬰れ、比伍同閑、罪に及ばざるは莫し。」とあるのは、右のごとき嚴罰の規定と関連するものであり、誇張はあるにせよ、劉宋においてこうした軍事に関わる「劫」により大獄の対象および獄囚となる者が、非常に多かったことを示すものと考えられる。

つづく南齊時代については、左表にあるように「劫賊の餘口」が即位・改元の際、原放された記事が存在する。

南齊時代における「劫賊の餘口」の原放

時 期	記 事	出 典
建元元年（四七九）四月	劫賊餘口没在臺府者、悉原放。	『南齊書』卷二高帝紀下、同月の詔
永明元年（四八三）三月戊寅	劫賊餘口・長徒勅繫、悉原赦。	『南齊書』卷三武帝紀、同日の詔
建武元年（四九四）十月癸亥	劫賊餘口在臺府者、可悉原放。	『文館詞林』卷六六八南齊明帝即位改元大赦詔

先の劉宋期の事例を踏まえた際、これは南齊においても華北を統一した北魏と対峙するなかで、「劫」による連

座の及んだ「餘口」が、即位・改元時の詔にその原放が記されるほど多かったことを示すものとされよう。

江南政權の軍事についてみると、東晋では僑民を主体とする兵戸、白籍戸が兵力の中心であったことが、すでに浜口重国、安田二郎両氏によって明らかにされている。⁽¹⁵⁾一方、「はじめに」で述べたように、僑民のなかには東晋後半ごろからその土着化にともない、建康を天下の中心と考える者がみられるようになり、さらには北魏の華北統一、元嘉二十七年（四五〇）の北伐失敗により中原恢復の可能性は極めて低くなった。

こうした僑民をめぐる変化と兵制の展開がどのような関係にあるのかという点について、従来、明確に論じられることはなかった。この問題について、筆者はかつて東晋後半から劉宋孝武帝期にかけて五等爵・民爵の賜与を通じた軍事動員が施行され、僑民にくわえ新たに江南の土着民も軍事に参加するようになったこと、その結果、兵制という点からみた際、江南に立脚した体制が構築されたことなどを論じたことがある。⁽¹⁶⁾

右の私見が当を得たものであるとすれば、先述した劉宋・南斉の詔、都官尚書の上奏はこうした新たな体制が構築されていくにつれ、軍事に関わる「劫」により大獄の対象および獄囚となる者が、非常に増加したことを受けて出されたものとされよう。宋齊時代に顕著にみられる華林園の再審判が、かかる「劫」の罪の減刑を述べる詔・上奏とまったく無関係であったとは考えがたい。そうであるとすれば、劉宋・南斉はそうした罪の再審判に相応しい軍事関連の場として、まず親衛軍の存在する華林園を、のちに軍礼・軍事と関わる閔武堂・中堂をも用いるようになったと考えられる。

おわりに

右で述べたことをまとめると、以下ようになる。

① 劉宋・南齊の華林園は遊宴を通じ大臣をはじめとする士人層に優遇をあらわすのみでなく、皇帝による勅命刑獄すなわち「詔獄」によって彼らを牽制し帝権に従わせる場として用いられた。

② 江南政権においては通常、官僚を弾劾する際、御史中丞、尚書左丞による手続きをへていた。しかし、諸王・大臣による専権がなされた場合、こうした手続きを経ている間に情報の漏洩ひいては彼らによるクーデタが生じる危険性があつた。華林園の「詔獄」はそうした事態を未然に防ぐべく、寒人層である制局監ら「御刀」の存在を背景に帝権を安定させる狙いもあつて行われたものと考えられる。

③ 東晋孝武帝期以後、華林園で遊宴が行われるにつれ、その警護にあたる殿中將軍の存在が重視されるようになった。こうした殿中將軍のもつ性格は華林園の増築、帝権強化の動きなどと相まって、劉宋孝武帝期に至る過程で制局監を中心とするものへ変化していったと考えられる。

④ 東晋後半から劉宋孝武帝期にかけて、僑民にくわえ新たに江南の土着民も軍事に参加する体制が構築されたが、その結果、「劫」により大獄の対象および獄囚となる者が非常に増加した。劉宋・南齊はそうした罪の再審判に相應しい軍事関連の場として、まず親衛軍の存在する華林園を、のちに軍礼・軍事と関わる閔武堂・中堂をも用いるようになったと考えられる。

東晋南朝はきわめて図式的に述べれば、建国当初の中原恢復をめざす国家から、劉宋孝武帝期に至る過程で僑民の土着化、元嘉二十七年の北伐失敗などによって、江南に立脚した体制を志向する国家へと質的に変貌せざるを得ない状況にあった。そのため東晋後半から劉宋孝武帝期に江南政権のおかれていた政治・社会的状況は、一軍事制度、一行政区を改変するといった程度の対症療法的な施策をもってしてはいかんともし得ない問題をはらんでい

た。江南政権はその改革のただ中において西晋の都であった洛陽に代わり、行宮の地たる建康を新たな天下の中心にするべく、その大規模な増築を断行している。この増築が改革と連動して行われたということ自体が、当時の江南政権がかかえていた問題の深刻さをあらわしているのである。

皇帝がその権力の安定、拡大を目指すことは中国史上、どのような時代においても見られる現象である。しかし、中原恢復に代わる新たな国家の結集点を模索していた江南政権では、とりわけその安定、拡大が求められていた。こうしたことは、華林園の「詔獄」が単なる大臣の訊問・誅殺にとどまらず、中原恢復に代わる国家の結集点を帝権強化に求める改革であったことを物語っていると考えられる。

さて、南北朝相互の影響については、たとえば官制を中心に南齊から北魏へ、あるいは反対に北魏から梁への影響を指摘する見解が存在する。ただ、それはどちらかが相手国の影響を一方的に受けたというのではなく、もともととうけ入れ側にそれを受容する素地があったと考えるべきであろう。

都城の御苑についていえば、五胡十六国に始まる華北の遊牧系政権はこれを放牧地や軍事施設として活用したことがすでに指摘されている。⁽¹⁾では、かかる華北の御苑においても、先述した「詔獄」のごとき現象を見出すことは可能なのだろうか。最後にこうした点を踏まえつつ、建康の華林園における「詔獄」が北魏洛陽・北齊鄴城に与えた影響について見てみたい。

『魏書』卷九一蔣少游伝に、陳寅恪氏の研究において「魏孝文之遣少游使江左、自有摹擬建康宮闕之意。」とされた蔣少游について、⁽²⁾

後に平城に於いて將に太廟・太極殿を營まんとするに、少游を遣はし傳に乗り洛に詣り、魏晉の基趾を量準せしむ。後に散騎侍郎と爲り、李彪に副ひ江南に使す。高祖 船乗を修むるに、其の多く思力有るを以て、都水

使者に除し、前將軍・兼將作大匠に遷し、仍ほ水池湖に泛戲せる舟楫の具を領せしむ。華林殿・沼舊を修め新を増し、金墉の門樓を改作するに及び、皆な措く所の意、號して妍美と爲す。

後於平城將營太廟・太極殿、遣少游乘傳詣洛、量準魏晉基趾。後爲散騎侍郎、副李彪使江南。高祖修船乘、以其多有思力、除都水使者、遷前將軍・兼將作大匠、仍領水池湖泛戲舟楫之具。及華林殿・沼修舊增新、改作金墉門樓、皆所措意、號爲妍美。

とあり、彼が帰国後、洛陽における華林園の改修・増築に携わったことが伝えられている。この点について、長広敏雄氏は、

蔣少游は、(散騎侍郎であつた) 太和十五年(四九二)十一月に、勅命により李彪の伴をして南朝(南齊)に公式使節としていつている。そういうチャンスにも、少游はおそらく熱心に南朝の都城や宮廷の諸設宮、文物を観察したにちがいない。それが洛陽華林園の造宮に役立ったと想像することは、さほど無理なことではなからう。

とあるように、太和十五年(四九二)における南齊への遣使が蔣少游による洛陽華林園の造宮に役立ったことを指摘されている。⁽¹⁹⁾筆者は長広氏の見解に賛同するものであるが、さらに『魏書』卷二一上咸陽王禧伝に、景明二年(五〇二)五月、宣武帝の輔政の大臣であつた咸陽王禧について、

禧 遂に其の妃の兄 兼給事黃門侍郎李伯尚と謀反す。……禧 洪池の東南より走るに、僮僕 數人に過ぎず、左右の禧に従ふ者、唯だ兼防閤尹龍虎のみ。……俄にして禧 擒獲せられ、華林の都亭に送らる。世宗 親ら事源を問ひ、千斤の鎖を著け龍虎に格し、羽林 之を衛るを掌る。

禧遂與其妃兄兼給事黃門侍郎李伯尚謀反。……禧自洪池東南走、僮僕不過數人、左右從禧者、唯兼防閤尹龍虎。

……俄而禮被擒獲、送華林都亭。世宗親問事源、著千斤鎖格龍虎、羽林掌衛之。

とあり、謀反に失敗した咸陽王禧が華林園に送られ宣武帝に訊問された際、「羽林」が関わっていたことが伝えられている。この史料から、北魏洛陽が単に造宮といったレヴェルにとどまらず、建康の華林園で行われた親衛軍と関わる「詔獄」の影響をも受けていたことを見てとることができる。

また『北齊書』卷一三趙郡王叡伝に、北齊後主のとき輔政の任にあった趙郡王叡について、

世祖 崩じ、葬後數日にして、叡と馮翊王潤・安德王延宗及び元文遙 後主に奏して云へらく、和士開 宜しく仍ほ内任に居るべからず、と。並びに入りて太后に奏す。因りて士開を出だし兖州刺史と爲さんとす。太后曰はく、士開 舊と驅使を經、留むること百日を過ぎんと欲す、と。叡 色を正して許さず。……入りて太后に見ゆるに、太后 復た以て言を爲すも、叡 之を執ること彌々固し。出でて永巷に至るや、兵に遇ひ執へらる。華林園に送り、雀離佛院に於いて劉桃枝をして拉ぎて之を殺さしむ。

世祖崩、葬後數日、叡與馮翊王潤・安德王延宗及元文遙奏後主云、和士開不宜仍居内任。並入奏太后。因出士開爲兖州刺史。太后曰、士開舊經驅使、欲留過百日。叡正色不許。……入見太后、太后復以爲言、叡執之彌固。出至永巷、遇兵被執。送華林園、於雀離佛院令劉桃枝拉而殺之。

とあり、趙郡王叡がとらえられた後、華林園に送られ劉桃枝に殺害されたことが伝えられている。この劉桃枝とは『北齊書』卷五〇恩倖伝に、

高祖の時に蒼頭陳山提・蓋豐樂・劉桃枝等數十人有り、俱に驅馳せる便僻にして、頗る恩遇を蒙る。天保・大寧の朝、漸く以て貴盛たり。武平の時に至り皆な以て開府・封王なり。……蒼頭 始まること家人よりし、情寄 深密たり。後主に及び、則ち是れ先朝の舊人にして、勤舊の勞を以て、此の叨竊を致す。

高祖時有蒼頭陳山提・蓋豐樂・劉桃枝等數十人、俱驅馳便僻、頗蒙恩遇。天保・大寧之朝、漸以貴盛。至武平時皆以開府・封王。……蒼頭始自家人、情寄深密。及於後主、則是先朝舊人、以勤舊之勞、致此叨竊。

とあるように、「蒼頭」とよばれる高氏の家人出身であり、『北齊書』卷一二琅玕王儼伝には彼が親衛軍の長として「禁兵」を率いていたことが記されている。皇帝にとって私的性格が強く、かつ親衛軍を率いていたという点は、先にみた制局監と共通するところがあるといえよう。

右には皇帝による訊問の記載がみられないが、このとき後主は十三歳であり、当時にあつて彼が直接、大臣を訊問できたとは考えがたい。従つて、趙郡王叡の殺害には胡太后的意思が強くはたらいっていたであろう。ただし、王がなぜ華林園において劉桃枝のごとき「蒼頭」により殺害されたのかという点からみた際、そこには自ずから先述した「詔獄」の影響が存在していたと考えられる。

このように北魏宣武帝、北齊後主のときには咸陽王禧、趙郡王叡らによる輔政が存在したが、そうした状況から帝権強化に向けて脱却せんとするまさにその時期に、親衛軍との関わりのなかで華林園における「詔獄」の影響がみられることは、単なる偶然とは考え難いであろう。そうであるとすれば、北魏洛陽・北齊鄴城はその造宮のみでなく、御苑を軍事的に活用していた遊牧系政権の伝統、および帝権強化に向けた動きなどと相まって、建康における「詔獄」の影響をも受けていたと考えられる。

【附記】 本稿は平成二二年度科研費助成事業・基盤研究（B）「最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究」（研究代表者・佐川英治）、及び平成二四年度科研費助成事業・基盤研究（C）「出土文物の分析による4～6世紀東アジアにおける文化融合・社会変動の研究」（研究代表者・小林聡）、平成二

四年度科研究費助成事業・特別研究員奨励費「古代中国における伝統の創造について―六朝隋唐を中心としてみた―」による成果の一部である。

注

- (1) 拙稿「東晋南朝における健康の中心化と国家儀礼の整備について」『七隈史学』第一三号、二〇一一年）参照。
- (2) 渡辺信一郎「宮闕と園林―三～六世紀中国における皇帝権力の空間構成―」『考古学研究』第四七卷第二号、二〇〇〇年。のち『中国古代の王権と天下秩序―日中比較史の視点から』第四章、校倉書房、二〇〇三年所収）参照。
- (3) 村上嘉実「六朝の庭園」『古代学』第四卷第一号、一九五五年。のち『六朝思想史研究』第五章第二節、平楽寺書店、一九七四年所収）参照。
- (4) 妹尾達彦「隋唐長安城の皇室庭園」（橋本義則編『東アジア都城の比較研究』第三章、京都大学出版会、二〇一一年）参照。
- (5) 渡辺氏註(2) 論文参照。なお、渡辺氏はこの軍礼・軍事関係施設における再審判について、当該論文の註(24)のなかで、「これがどのような意味をもつのか、現在のところよく分からない。」と述べておられる。
- (6) 辻正博「魏晋南北朝時代の聴訟と録囚」『法制史研究』五五、二〇〇五年）参照。
- (7) 張学鋒「六朝建康城的発掘与復原新思路」『南京晚莊学院学报』二〇〇六年第二期、二〇〇六年。のち増補・翻訳として同氏〈小尾孝夫訳〉「六朝建康城の研究―発掘と復原」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第一三号、二〇一二年）参照。
- (8) 渡辺氏註(2) 論文、小林聡「晋南朝における宮城内省区域の展開―梁陳時代における内省の組織化を中心に―」『九州大学東洋史論集』第三五号、二〇〇七年）参照。
- (9) 富田健之「漢代における『詔獄』の展開」『古代文化』第三五卷第九号、一九八三年）参照。
- (10) 唐における流刑の裁判に関しても、同様の手続きが見受けられる。この点については、辻氏「流刑案件の

裁判手続き」(『唐宋時代刑罰制度の研究』第二章第二節、京都大学学術出版会、二〇一〇年) 参照。

- (11) 越智重明「領軍將軍と護軍將軍」(『東洋学報』第四卷第一号、一九六一年。のち『中国古代の政治と社会』下編「魏晋南北朝の政治と社会」第二章、中国書店、二〇〇〇年所収)、張金龍「南朝監局及其禁衛權力問題」(『文史哲』二〇〇三年第四期、二〇〇三年。のち『魏晋南北朝禁衛武官制度研究』下冊第四編附章、中華書局、二〇〇四年所収) 参照。

- (12) 『大正新脩大藏經』では「御力」とするが、一方、その校勘記に宋・元・明の三本および宮内庁書陵部蔵宋本では「御刀」としていることが記されている。本稿であげた南北朝期に関する史料の事例を踏まえた際、「應勅」や「茹法珍」とともに「御力」という表現が出てくるのは前者のみであり、それだけに極めて例外的である。従って、いま後者にしたがう。

- (13) 越智氏註(11) 論文参照。

- (14) 祝総斌「魏晋南北朝尚書左丞糾彈職掌考」兼論左丞と御史中丞の分工」(『文史』第三二輯、一九九〇年) 参照。

- (15) 浜口重国「魏晋南北朝の兵戸制度の研究」(『山梨大学学芸学部紀要』第二号、一九五七年。のち『秦漢隋唐史の研究』上巻第一〇、東京大学出版会、一九六六年所収)、安田二郎「儒州郡県制と土断」(川勝義雄・磯

波護編『中国貴族制社会の研究』京都大学出版会、一九八七年。のち『六朝政治史の研究』第三編第一章、京都大学学術出版会、二〇〇三年所収) 参照。

- (16) 拙稿「劉宋孝武帝の戸籍制度改革について」(『古代文化』第五九卷第一号、二〇〇七年)、「東晋宋初的五等爵―以五等爵与民爵的關係为中心」(『中国中古史研究』第一卷、中華書局、二〇一一年) 参照。

- (17) 朴漢濟「唐長安城三苑考―前漢上林苑의 機能과 비교하여」(『歴史学報』第一八八輯、二〇〇五年。のち翻訳として同氏「山崎雅稔訳」『唐長安城三苑考―前漢上林苑の機能と比較して―』妹尾達彦編『都市と環境の歴史学』第二集、中央大学文学部東洋史学研究室、二〇〇九年)、妹尾氏註(4) 論文参照。なお、後述する北魏・北齊の「詔獄」には、いわゆる内朝の影響も存在したと考えられる。

- (18) 陳寅恪「隋唐制度淵源略論稿」二、礼儀附都城建築(商務印書館「重慶」、一九四〇年) 参照。

- (19) 長広敏雄「六朝の苑囿」(『六朝時代美術の研究』第七章、京都大学人文科学研究所研究報告、一九六九年増補版、朋友書店、二〇一〇年) 参照。